動物研究部
和牛改良研究会で研究発表

改良研究会・農業高校の部

飛騨牛さらに有名に

岐阜県内3校　取り組み成果披露

【岐阜・飛騨】高山市のホテルで第13回和牛改良研究会（農業高校の部）が開かれた。県内から飛騨高山高校と加茂農林高校、大垣養老高校が参加し、研究の成果を披露した。全国和牛登録協会岐阜県支部が主催。生徒や生産者、関係機関の担当者ら約70人が参加した。

発表する飛騨高山高校の生徒ら

飛騨高山高校動物研究部の部員10人は、大きな目標に「飛騨牛を世間にもっと広める」を掲げた。その方法の一つが、先輩部員から受け継いできた「ともみ系」の増頭だった。

同校では、「ともみ系」14頭を飼育しているが、繁殖障害が比較的多く、増頭の課題として浮かび上がった。部員は、原因の一つである卵巣嚢腫（のうしゅ）対策について調査。改善するため、①ビタミン剤の給与②代謝プロファイルテスト③個体ごとの発情兆候の観察④テープを用いた繁殖牛の状態の可視化――を実施した。その結果、個体ごとの繁殖状況が分かりやすくなって発情の見逃しが減少。受胎までの平均人工授精回数が0・3回減り、繁殖障害は改善可能だと分かった。

発表をした松木仁美さんは「部員には、飛騨牛をもっと有名にしたいという思いがある。卒業を控えているが、先輩から受け継いできた牛と思いを、後輩にもしっかりと残していきたい」と話した。

加茂農林高校は「飛騨牛の飼育に関する研究」「北海道全共に向けた取り組み」など、大垣養老高校の生徒は「2025・26年度和牛甲子園や県共進会に向けた取り組み」などを発表した。

全国和牛登録協会岐阜県支部の山田英信部長は「発表から、飛騨牛に対する思いが伝わった。経営者にとっても参考になる事例がたくさんあった。これからも飛騨牛の若い担い手を応援していきたい」と話した。

日本農業新聞　　令和７年２月２６日（水）